様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３０１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０９３８

研究課題名（和文）心理的・社会的自立の基盤が脆弱な児童・若者への包括的支援枠組みについての研究

研究課題名（英文）A study to investigate the measures for independence of youth with psycho-social risk

研究代表者
村澤　和多里（MURASAWA, Watari）

札幌学院大学・人文学部・教授

研究者番号：８０３８３０９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　社会的排除が進行する現代において、学歴や経済上のリスク、障害などを抱えた若者の社会的自立が問題になっている。本研究では、このような近年浮上しつつある問題に対応する枠組みつくりを目的とした。調査研究の結果、ひきこもりを中心にした心理・社会的自立に困難を抱えた若者の心理的支援の課題および方向性について検討することができ、児童養護施設に入所している被虐待児の抱える心理的リスクについても検討することができた。

研究成果の概要（英文）：　In recent years, youth with risk of independence has become a social problem. Therefore, the purpose of this study was to investgate the measures for increasing problem. Through research, we found the orientation of support for the youth at risk like people in " hikikomori " state. We also investigated the psychological risk on abused children in the foster home.

研究分野：臨床心理学

キーワード：被虐待児　ひきこもり　社会的自立　若者支援　児童養護施設

１．研究開始当初の背景

近年の社会的排除の急激な進行の中、学歴や経済上のリスク、障害などを抱えた若者の社会的自立が問題になっている（村澤他 2012 など）。児童養護施設で生活する児童の場合、これらのリスク要因を多重に被っている場合が多く、社会的自立はますます困難になってきている。さらに近年、児童虐待問題の深刻化を背景に、措置児童のうち心理的なケアを必要とする児童の割合が増加しており、心理的自立の困難も重なっている。

（１）貧困・ネグレクト・愛着不全

当初、児童養護施設における心理的ケアにおいては虐待による外傷性の症状に焦点があてられてきたが、近年は再び愛着形成へと注目が移ってきている。愛着問題が注目されるようになった背景には、措置児童の被虐待経験の 70%がネグレクトであることや、家庭の養育機能の低下によるネグレクトや家庭崩壊などによる愛着形成の不全が存在すると考えられる。

（２）施設内で生じる二次的障害

わが国の児童養護施設の場合、依然として大舎制の色彩が色濃く残っており、児童養護施設における生活が十分に自己形成の場としての機能を果たすことができないでいる側面もある。措置児童は入所に至るまでに経験した虐待を始めとした外傷、施設入所にともなう早期の離別体験、またそれぞれ違う心理的問題を抱えた児童集団の中で生じるトラブル、という三重の心的外傷を体験している。

（３）社会的自立の困難

措置児童は社会的自立においても重大な困難を抱えている。上記のように措置児童の多くが十分に愛着形成や自己形成をする機会を得られずにいるが、反面、措置期間には期限があるため早急な自立を迫られるという矛盾がある。そのため、児童は十分な自己形成がなされないまま社会に「押し出される」ことになり、非行や不適応状態に至る例も多い。特に、中高生以降に措置された児童の場合、十分に施設との関係を築くことができないまま非行などの不適応状態に陥り措置変更が繰り返されたりするため、この問題は深刻である。

（４）児童養護施設における自己形成と社会的自立のための支援の必要性

措置児童の社会的自立を促進するためには、安定的な自己形成と社会的スキルの取得を保証した上で、措置解除の後もある程度の期間にわたって社会的自立を援助していくことが必要であると思われるが、現在の施設の置かれた状況の中でそれを実現するのは非常に困難であるといわざるを得ない。

２．研究の目的

社会的排除が進行する現代において、学歴や経済上のリスク、障害などを抱えた若者の社会的自立が問題になっている。本研究では、このような近年浮上しつつある問題に対応する枠組みつくりのために、調査を行い、現場の実践的「知」を結集させることを目的とした。また本研究では、措置解除後の児童だけでなく、家庭の機能不全など社会的自立のための基盤が脆弱な若者たちへの支援について、児童養護施設と若者自立支援施設を架橋しつつ、臨床心理学と社会学の交差した視点から検討することを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、以下の２つの研究班を設けた。

（１）児童養護施設研究班：班統括者 久藏孝幸（研究分担者）
主に児童養護施設を対象にした調査研究を行った。

（２）　若者自立支援施設研究班：班統括者 村澤和多里（研究代表者）
地域若者サポートステーション等を対象に調査研究を行った。

なお、それぞれの研究班の調査研究は、「実践についての調査」と「児童・若者についての調査」からなっており、以下のような手順で研究を進めた。

・実践についての調査：児童養護施設や若者自立支援施設のスタッフと連携して、社会的自立支援についての実践についての知見を積み上げていった。
・児童・若者についての調査：調査対象施設の児童・若者を対象にした調査した。

すでに申請者らはこれらの研究には着手しているが、1 年目は成果をより深化させて実態を明らかにし、また 2 年目からは支援実践についての理論的な検討をしていった。

４．研究成果

本科研費助成事業においては、児童養護施設における調査研究と、ひきこもりを中心とする若者の自立支援施設における調査及び実践についての研究を行った。

（1）児童養護施設における心理的ケアについての研究

①被虐待体験が与える心理的影響についての調査

児童養護施設の児童や被虐待児に対する心理療法においては、基本的に身体的虐待や心理的虐待を念頭にした「トラウマケア」に焦点を当てたアプローチが主流であったが、実際には明確なトラウマ体験を有しない「ネグレクト」された児童が被虐待児の多くを占めており、被虐待体験の内容ごとに、それが及ぼす心理的側面への影響を明らかにし、それに応じた支援をしていくことが必要である。本科研費助成研究においては、そのための基礎作業として、文献による検討と児童擁護施設職員を対象にした調査を行った。

文献についての調査は、特に 2000 年代に入ってからの被虐待児を対象にした調査研究を検討し、身体的虐待を受けた児童において攻撃性が多く指摘されていることを確認した。この文献研究については、村澤（印刷中）において公表予定である。

児童養護施設の職員を対象に行った調査については、北海道及び本州の児童養護施設 10 施設に依頼し、直接児童に接している職員たちが感じている、身体的被虐、ネグレクト、性的虐待のそれぞれの被虐待体験を有している児童の行動特徴について質問紙をもちいて調査し、比較検討した。その結果、身体的虐待を受けた児童において攻撃性の強さが確認され、ネグレクトをされた児童においては愛着の問題、性的虐待を受けた児童においては習癖の問題がうかがわれた。この調査研究の成果については現時点では未発表であるが、今後公表していく予定である。

②児童自立支援施設における支援実践についての調査研究

児童自立支援における支援実践についての研究として、自立支援のベテラン職員による経時的な経験を文献収集および聞き取り調査をすることでデータ化し、これらの分析により、支援実践の中で必然的に支援者の側にも変化が促されるなど、子どもたちとの相互作用のダイナミズムが起きていることがうかがわれた。これらを 2017 年３月の日本発達心理学会において発表を行い、久藏（2017）において公表した。

（2）若者自立支援における心理的支援についての調査

地域若者サポートステーションなど若者自立支援施設においては、特に社会的自立の基盤を生育家庭に期待できない若者などについて、心理的ケアや自立支援についての事例的研究を積み上げていった。

①ひきこもり支援実践者への聞き取り調査

ひきこもりの若者支援において優れた実践を行っている実践者を対象にした調査を行い、彼らの生活経験と支援観の関係について焦点を当てて検討した。具体的には、特に

注目される実践者として、とちぎ若者サポートステーション代表、北海道レターポストフレンド・ネットワーク代表、和歌山県の紀の川病院副院長にインタビューを行い、共通点としてひきこもり経験者によるアプローチの重要性を見出した。また、それぞれの実践者は、ひきこもりの若者たちによる地域おこしの視点を有していた。

これらの調査結果については、研究代表者が監修した書籍（村澤監修・杉本編 2015）にまとめられている。

②ひきこもり支援についての実践的調査研究

研究代表者が 2007 年の設立以来関わりを持ってきた若者自立支援施設で、研究代表者自身が行ってきた過去の支援実践について、支援施設設立時から４年間の実践記録をまとめ直し、現在の視点から二つの再検討を行った。

一つめは、筆者が心理カウンセリングを行ったひきこもりの若者の 2 事例についての検討である。彼らが自身を他者とは異質なものであると感じ、自ら社会から退いていくプロセスについて分析するとともに、回復のプロセスにおいては、他者との相補的な関係性を通して新たな自己を生成していくことが確認された。

なお、この検討内容については、研究代表者が 2017 年に北海道大学に提出した博士論文の第５章（村澤 2017）において公表されており、現在投稿中の論文（村澤）においても記載されている。

二つめは、前述の心理カウンセリングを行った２事例の検討で見出した、相補的な関係性を通した自己生成のプロセスについて深く検討するために、ひきこもりの支援において中核的な役割を果たしている「居場所」プログラムの活動を検討した。検討においてバフチンの対話理論を参考に検討し、その結果、同じ体験をした者だけがわかる暗号を交換しあうような発話形式が、彼らの「同質性」の体験を活性化させていき、その中で「待つ–待たれる」といった相補的な関係性が体験され、彼らにとって忌まわしき属性である「異質性」が、「個性」として受け入れられていくことが見出された。

なお、この検討内容については、研究代表者が 2017 年に北海道大学に提出した博士論文の第６章（村澤 2017）において公表されている。

③理論的研究

理論的研究としては、調査や実践によって得られた知見について、臨床心理学的観点と社会学的観点とを交差させながら、社会的排除とひきこもりという現象との関係について考察し、今後の枠組みを探った。

現段階での研究成果を総合すると、「ひきこもり」という現象は、個人の心理的な問題に還元できるものではないにもかかわらず、発達障害や家庭の問題などのさまざまなリスクを抱える個人が「不登校」「いじめ被害」「就労の失敗」といった社会的体験をくぐり抜ける中で、自己完結的なリスク管理システムを形成していくプロセスであることを指摘した。また、個人が対人的リスクのコントロールを過剰に強いられるようになった背景としては、「包摂型社会」から「排除型社会」（Young,J.）への移行に伴って個人のリスクが表面化していくとともに、それに対する自己管理が過剰に強いられるようになっていったことを指摘した。

回復していく上での鍵となるのは、自身の異質性（リスク）を過剰にコントロールしようとする「スティグマ化」「トラウマ化」という心理的プロセスから脱却し、他者との相補的な「役割交代模倣」のような関係性を（再）構築していくことであった。これからの支援の枠組みとしては、相補性の原理に基づく「居場所」の創出や、個人のリスクを共同的に管理する「『自己コントロール』の社

会化」、支援者や当事者が相互に支え合う関係である「親密性のセーフティネット」を構築していくことこそが、重要であると考えられる。

なお、このような理論的研究については、村澤（2016）および研究代表者が 2017 年に北海道大学に提出した博士論文の終章（村澤 2017）において公表されている。

（３）研究の到達点と今後の課題

本科研費助成研究においては、児童養護施設に措置されている児童の心理的困難についての検討に着手し、また自立に困難を抱えた児童への支援のあり方について文献を用いた検討を行った。またひきこもりを中心にした心理・社会的自立に困難を抱えた若者の心理的支援の課題および方向性について検討することができた。したがって、研究開始当初に掲げた目的の 70%程度は達成できたということができるであろう。

しかし、児童養護施設などに措置されている児童の抱えている困難と、若者たちの抱えている困難を包括的に捉えることはできておらず、社会的排除の仕組みにおいてそれらの問題を包括しうる視点を見出したところまでで研究期間が終了した。この点については、今後の課題として残された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 川辺大樹・村澤和多里、被虐待体験が及ぼす心理的影響について（その１）、査読なし、札幌学院大学心理臨床センター紀要、17、2017 刊行予定（印刷中）

② 久蔵孝幸、北海道家庭学校第五代校長の著述の変遷の検討、査読なし、札幌学院大学人文学会紀要 101、2017、113-120.

③ 村澤和多里、若者自立支援の行方：ひきこもり支援を中心に、査読なし、生活指導研究 33、2016、27-34.

④ 村澤和多里、若者支援における社会的承認の再構築、査読なし、教育 837、2015、26-34.

〔学会発表〕（計１件）

① 久蔵孝幸、北海道家庭学校第五代校長の「言葉」の変遷の検討の試み、日本発達心理学会、2017.03.25、広島国際会議場

〔図書〕（計１件）

① 村澤和多里監修、杉本賢治編、ひきこもる心のケア：ひきこもり経験者が聞く１０のインタビュー、2015、世界思想社、192 頁

〔その他〕（計 1 件）

博士論文

① 村澤和多里、「ひきこもり」についての理解と支援の新たなる枠組みをめぐって：心理-社会的な視点からの探求、博士論文、2017、北海道大学

６．研究組織

（１）研究代表者

村澤　和多里（MURASAWA, Watari）
札幌学院大学・人文学部臨床心理学科・教授
研究者番号　80383090

（２）研究分担者

久蔵　孝幸（HISAKURA, Takayuki）
札幌学院大学・人文学部臨床心理学科・准教授
研究者番号　00451443

（３）連携研究者

村澤　真保呂（MURASAWA, Mahoro）
龍谷大学・社会学部・教授
研究者番号　80351336

山尾　貴則（YAMAO, Takanori）
作新学院大学・人間文化学部・教授
研究者番号　80343028